

編集後記

今号では、昨年末に刊行した前号には（記念号論文集という性質上）掲載できなかった書評を含め、多分野に跨がる充実した論説群が掲載されている。当初の予定では今号も昨年内に刊行する予定であったのだが、諸事情により年を越しての刊行となってしまった。早々に入稿して下さいました執筆者の方々にお詫び申し上げます。

論説には、各領域の気鋭の若手・中堅研究者による六本の論考が収録されている。大きく分けると、倫理学系が三本、政治学系が三本である。まず、橋本昭典氏の論考「儒教道德の源泉としての情感主義」は、社会倫理学としての中国哲学研究という野心的試みとして読むことができる。橋本氏は本論考の中で、「正しい書としての『論語』受容の傾向に対して、孔子自身の正邪の基準を問い直すことで批判を加え、より適切な古典との向き合い方を提示してい

る。応用倫理学の領域からは、神崎宣次氏に論考「異議申し立ての抑圧に抗して」を寄稿していただいた。神崎氏は、政治的な争点となりうるような案件に対して異議申し立てを行なう学者たちが社会的に沈黙させられようという問題について、研究者倫理という視点から、そこでいったい何が問われているのかを抉り出している。臨床哲学の旗手、三浦隆宏氏による論考「活動しながら考える」では、ハンナ・アーレントの思考論を文献的に辿りながら、「哲学カフェ」などの公共的な対話実践の試みを哲学的に跡づけることが試みられている。

国際政治学の領域からは、三本の意欲的な論考が寄稿された。佐藤史郎氏の論考「核の倫理」の「政治学」では、ともすれば安全保障という視点に偏りがちな核兵器をめぐる国際政治の問題が新たな視点から論じられる。佐藤氏は、「核の禁忌」という概念を手がかりに、核兵器問題について安全保障と対をなすべき倫理的な視点がいかにありうるかを現実主義的な観点から冷徹に捉え直している。また、今号唯一の査読論文である小松氏・角田氏の共著論考「人道的介入における国益と価値の調和」では、人道的危機への武力介入のあり方とその実効性に及ぼす

国益の影響について英国学派の観点から論じられる。小松氏と角田氏は、道徳的価値を組み込んだ「進歩的な国益」という英国元首相ブレアによつて提示された概念が介入の実効性に及ぼす影響を批判的に吟味し、連帯主義の人道的介入論という英国学派の議論の中に「国益と価値の調和」を実現させる条件を探ろうとする。そして、当研究所の大庭弘継第一種研究員による論考「存在可能」な主体」では、人道的介入の根拠の中に含まれる「国際共同体」なるものが多角的に検討され、「国際共同体」を「人びとを動かす観念」として捉えることが提言されている。

書評には、政治思想研究の二つの話題書に対して、斯界の気鋭の論客がそれぞれ迎え撃ち、また、倫理学の話題書に対して、法哲学随一の論客が一戦を交える、といったスリリングな対決の場を幾つも用意することができた。とりわけ、眞嶋俊造著『民間人保護の倫理』については、本誌初となる往復書評を実現した。戦争を論じるという営みに対する評者と著者の異なるパースペクティブの間で火花が散る様をお楽しみいただきたい。

奥田太郎、大庭弘継